

2 妻木晩田遺跡における貯蔵穴について

はじめに ー問題の所在ー

弥生時代の人々が、収穫物をはじめとする余剰生産物をどのように蓄えていたのかは、集落の景観や集落内の集団関係を明らかにするうえで重要な問題点である。当時の貯蔵施設と考えられている遺構のひとつに、断面が袋状を呈する土坑、いわゆる「袋状土坑」がある。妻木晩田遺跡においても多くの袋状土坑が検出されているが、これらを対象とした検討はこれまで充分に行われていたとはいえない状況である。

そこで本稿では、妻木晩田遺跡における袋状土坑の時期的、空間的なあり方について整理し、堅穴住居や高床倉庫との関係について検討することで、貯蔵施設の管理形態という視点から集落構造の解明を試みる。

1 貯蔵穴の定義と認識

袋状土坑が貯蔵穴と考えられる根拠は、この形態の土坑から炭化米など貯蔵物の出土が報告されていることによる¹⁾。もっとも、近畿～東海地方の「貯蔵穴」にみられるように、貯蔵物の出土は袋状土坑に限られた属性ではない。山陰地方においても、断面が袋状とならないものの、形態や立地から落とし穴や墓壇とは考えにくく、かつ規模（容積）が袋状土坑に匹敵するような大型の土坑が普遍的に存在する。これらの土坑についても貯蔵穴としての性格が考えられるが、貯蔵穴以外の可能性を完全に排除することはできない。八峠興が指摘するように、「断面形のみで貯蔵穴とするのではなく、住居あるいは集落の中での総合的な判断」（八峠2000、p 88）によらざるを得ないのが実情である²⁾。

以上のように「貯蔵穴」の厳密な定義は困難であるが、本稿では以下、袋状土坑について「貯蔵穴」の語を用い、貯蔵穴の可能性を持つその他の形態の土坑については適宜言及することとする。文中、土坑についてはSK、堅穴住居跡にはSI、溝にはSD、掘立柱建物にはSBの略号を用いる。

また、貯蔵穴には屋内に設けられたものもある³⁾。屋外、屋内での貯蔵のあり方の違いは重要な問題点であるが、論点を絞るため、本稿では屋外貯蔵穴を中心として議論を進めることにしたい。

2 貯蔵穴の形態的特徴と時期的変遷

始めに、妻木晩田遺跡のこれまでの調査で検出された貯蔵穴の形態や規模についての特徴をまとめておく。

底面の形態は円形、楕円形、長方形、隅丸方形があり、円形、楕円形が大部分である。長方形のものは妻木山地区に多い傾向がある。また、底面の中央付近にピットを持つもの、底面の周囲に溝を持つものがあり、貯蔵穴の機能に関連する構造と考えられる⁴⁾。ただし、確認例は前者が9例、後者は6例と、全体の1割以下である。これらは中期後葉から後期中葉までの古い段階にみられるようである。その他、土坑の上面に蓋受けとして機能したと考えられる円形や方形の浅い段が設けられている例もある。

規模は大小のパラエティーがあるが、後期中葉以降、底面の長軸が2mを超えるものが現れ、時期が新しくなるにつれて大型化する傾向がある。

次に、数の時期的推移について確認する（第1表）。貯蔵穴の初現は中期後葉、終焉は古墳時代前期初頭であり、集落が継続するほぼ全期間にわたって造られ続けていることになる。時期別にみると、その推移は堅穴住居数の増加とおおむね対応しているように見受けられるが、地区ごとに様相は異なる。

中期後葉の貯蔵穴は松尾頭地区、妻木山地区、洞ノ原地区西側丘陵で確認されている。なお、妻木晩田遺跡において中期後葉に遡る堅穴住居は松尾頭地区で3軒が確認されているのみであるが、中期後葉の貯蔵穴にはこれに先行するものがある。したがって、松尾頭地区、妻木山地区における貯蔵穴の出現をもって妻木晩田遺跡の本格的な集落形成が始まるといえる。

松尾頭地区では、中期後葉以降後期後葉まで一定数が継続して造られている。一方で妻木山地区では、後期前葉以降空白期ともいえる減少を経て、終末期後半に再び増加する。古墳時代前期まで造られ続けるのは妻木山地区のみである。

妻木山地区の後期前葉から後葉にかけての「空白期」については、掘立柱建物や袋状土坑以外の土坑が貯蔵施設として利用された可能性、また時期不明の貯蔵穴の中にこの時期に該当するものが含まれる可能性などを考慮する必要がある。また、共時的にみた場合、地区ごと、あるいは各地区内における分布の偏在も読み取れるが、これについては次節で改めて問題にしよう。

3 貯蔵穴の分布状況

集落内における「貯蔵穴」の分布のあり方については、高床倉庫の分布と合わせて、集落内での貯蔵、消費単位や余剰生産物の管理形態を探ろうとする視点からの研究が進められてきた（石野1967、乙益1983、佐原1979）。

鳥取県内の事例については、八峠興が東伯耆を中心として検討している。拠点集落での貯蔵穴のあり方として①集落の中に貯蔵穴が集中する場所がある、②貯蔵穴の位置の変化は個々の住居よりも集落全体に関わる、③住居は継続しても貯蔵穴は古墳時代前期頃に消滅する、といった3点を特徴として指摘する。一方で小規模な集落では①貯蔵穴の位置は作業的な場所と関わる、②掘立柱建物を持たない場合、貯蔵穴は住居1軒あたり4～5基、③貯蔵穴と掘立柱建物は機能的に補完している例がある、といった特徴をあげる（八峠2000）。貯蔵物の集団管理を示唆する貯蔵穴の集中的分布を拠点集落の特徴とし、拠点集落と小規模集落との間に食糧管理形態の質的な差異が存在したことを強調する見解といえる。

以上の研究史を踏まえ、本稿においても、集落内の集団がどのように貯蔵施設を所有、管理していたのかという視点から、竪穴住居と貯蔵穴との分布の関係を中心に検討する。ここで「集落内の集団」としてとらえる対象は、複数の竪穴住居のまとまりとして視覚的に把握される「居住単位」である（高田2003）。居住単位のグルーピングについては高尾浩司の案を援用する（高尾2006、第2図）。

まず、妻木晩田遺跡における貯蔵穴の初現期である中期後葉の分布状況から検討しよう。この時期には、松尾頭地区3区北端の丘陵肩部から5区東側の丘陵頂部平坦面にかけての東西80m、南北30mの範囲に、貯蔵穴とその可能性を持つ土坑が20基以上分布している。これらは中期後葉（IV-1～3期）を通じて造られた土坑の累積の数であるが、この範囲内に当該期の他の遺構は存在しないことから、ここには一定期間「貯蔵空間」が形成されていたものと評価できる。

ただし、これらの貯蔵穴と居住単位の関係は明確ではない。先述のとおり、中期後葉の住居は松尾頭地区で3軒が確認されている。上述の貯蔵穴集中箇所にもっとも近い住居は、6区の北向斜面に位置するSI100であるが、距離にしておよそ80m離れている。残る2軒は、3区から

谷を隔てた北側の丘陵南端に位置するSI22、24である。

中期後葉の遺構が、1区と3区、5区との間の谷を臨む丘陵縁辺に分布することから、この谷筋を生産基盤として松尾頭地区における集落形成が始まった可能性が考えられるが、3区、5区側では丘陵上に貯蔵穴のみが造られ続けるといってやや不自然な状況である⁹⁾。これらの貯蔵穴に対応する住居の確認が今後の重要な課題である。

また、6区の東側にあたる3区南端北向斜面にも当該期の貯蔵穴が分布するが、これらはSI100と関連を持つものかもしれない。IV-3期の貯蔵穴6基が、等高線に沿って3基ずつ等間隔に並ぶ規則的な配列をとる。これについても、6区南側の未調査地に当該期の住居が存在する可能性があり、今後の調査によって確認が望まれる。

後期以降、貯蔵穴が集中する分布状況はどの地区でも認められず、まとまっても3基前後である。このような状況のなかで、妻木山地区4区北東端から7区にかけての妻木山A群におけるあり方は、居住単位と貯蔵穴の関係を探るうえで良好な検討材料である。妻木山A群では、竪穴住居6軒（SI146、147、148、176、177、178）、溝1条（SD34）、貯蔵穴3基（SK211、213、215）、掘立柱建物1棟（SB211）が検出されている。これらのうちSB211は時期不明、SI146は後期中葉、残りは後期後葉である。

報告書では、これら後期後葉の遺構について、同時並存の物理的可否や埋土の状況、土器の接合関係などを基にさらに3段階に細分して集落構造の変遷を復元している（馬路2006）。まず、3基の貯蔵穴はSD34に伴うと考えられることからこれと同時に並存とし、SD34とSI147とは、後者の周堤の幅を考慮すると同時並存は不可能とする。その他の検討も踏まえると、SI148、176、178と3基の貯蔵穴が同時に並存（後期後葉第1段階）するものと復元された。すなわち、3軒の竪穴住居（推定居住人数は19人）が位置する斜面上方に3基の屋外貯蔵穴を伴い、住居のうちの1軒（SI176）はさらに屋内貯蔵穴を伴う、という貯蔵形態のあり方が想定されるのである。これら3基の貯蔵穴が3軒の住居それぞれに附属するものか、あるいは居住単位による共同管理であったのかは検証できないが、屋外貯蔵穴がおおむね住居1軒につき1基の割合で伴うことを示す例といえよう。

4 「高床倉庫」の分布状況との関係

先にみた妻木山A群でのあり方は高床倉庫を伴わない居住単位における例であるが⁹⁾、散在する貯蔵穴の分布の意味を明らかにするためには、高床倉庫の分布のあり方と合わせて検討する必要がある。

高床倉庫は遺構としては「掘立柱建物跡」として検出される。妻木晩田遺跡における掘立柱建物の分布のあり方については、高田健一が検討している（高田2003）。高田は、掘立柱建物の分布パターンとして、竪穴住居の分布に沿うように存在する場合と、居住単位間の遺構密度が低い部分に存在する場合とに分類した。

前者については、竪穴住居に伴う高床倉庫の累積結果ととらえている。例示された妻木山3区に認められる掘立柱建物の列状分布について、高田は北隣する妻木山D群の各住居に伴う倉庫の累積と考え、これを倉庫群の集中域と評価した丹羽野裕の見解（丹羽野2002）に反論している。なお、この妻木山D群では貯蔵穴は確認されていない。さらに、D群の南東には高床倉庫も貯蔵穴も伴わないE群が位置する。従ってこれらの高床倉庫はD群とE群の双方に関係する可能性もある。

同じく前者のパターンに属する居住単位のうち、妻木山D群と同様に貯蔵穴を伴わない例として妻木新山A群（IS区）、同G群（3区）、旧小真石清水地区がある。妻木山D群の東側にあたる同C群では、明確な屋外貯蔵穴は伴わないものの、壁に3基の貯蔵穴を設けた竪穴遺構1基が存在する。

一方で、松尾頭E群（3区）、妻木山H群（2区西端）、同L群（1区）など、高床倉庫と貯蔵穴が混在する居住単位もある。松尾頭E群は、SI100を含めれば中期後葉から終末期にいたるまで、竪穴住居と貯蔵穴が造られ続けている。貯蔵穴と高床倉庫はまとまることなく散在する。未調査区への遺構の広がりやを考慮しなければならぬものの、各時期ともおおむね住居とほぼ同数の貯蔵穴が確認されている。

妻木山H群、L群においては、時期の判明している貯蔵穴はすべて終末期以降である。両群ともに終末期以降の高床倉庫も確認されており、貯蔵穴と併存している。

居住単位間の遺構密度が低い部分に存在するパターンとして、松尾頭地区B群とC群間、妻木山地区I群、同J群とK群間の掘立柱建物群があげられている。高田は、

これらの建物の中に居住単位間を結びつける機能をもった建物が含まれる可能性を示している（高田前掲）。通常の高床倉庫とは異なる性格が想定される梁間2間、桁行2間の9本柱建物（中原2002）がこうした分布をとることからの推測であろうが、すべてがそうした特殊な建物とは考えにくく、通有の規模の建物には高床倉庫も含まれているのではないだろうか。そして、先にみた住居に近接する高床倉庫を各住居に伴うものとする、住居からやや距離を置いて分布するこれらの高床倉庫は、居住単位ごと、あるいは複数の居住単位によって共同管理された倉庫である可能性が考えられる。ただしこれらの高床倉庫は、規模の点では他のパターンに属する高床倉庫と大きな差異はない。一見密集する分布状況についても、長期間にわたる遺構の累積であることに注意するならば、整然と立ち並ぶ倉庫群として復元することは難しい。

また、これらの居住単位においては、住居数に比べて数は少ないものの、住居に近接する貯蔵穴や高床倉庫が散見される。これらはその位置関係から各住居に伴うものであり、共同管理の高床倉庫とは性格を異にするものではないだろうか。

5 妻木晩田遺跡における貯蔵形態

以上、居住単位と貯蔵施設の関係を整理すると、以下のようなパターンに分類できる（第1図）。

- (1) 住居から離れた場所に貯蔵穴が集中して分布する。
- (2) 居住単位に高床倉庫のみが伴う。高床倉庫は住居の分布に沿うように配置される。
- (3) 居住単位に高床倉庫と貯蔵穴が伴う。高床倉庫は住居の分布に沿うように配置される。
- (4) 居住単位からやや離れた場所に高床倉庫を伴うとともに、住居に近接して少数の貯蔵穴、高床倉庫を伴う。

さて、これらのパターンの違いは何に由来するのであるだろうか。

(1)については、現状では中期後葉の松尾頭地区と妻木山地区に限って認められるあり方であり、他のパターンとは時期差として理解される。

後期以降、(2)(3)(4)のパターンがみられる。これらのうち(4)は、共同管理されたと考えられる高床倉

庫を伴う点で(2)(3)と異なる。このパターンをとる居住単位は集落内でも限定的な存在であり、松尾頭B群とC群のように大型の竪穴住居が集中する例があることや、妻木山地区の9本柱建物、松尾頭B、C群に近接する大型掘立柱建物(SB41、53)の存在から、居住単位の階層差を反映したものと考えられる。想像を逞しくすれば、ここに貯蔵されたのは9本柱等の特殊な建物で行われた祭儀に供される余剰生産物であり、階層的に上位に属する居住単位がそれらを管理する役割を担っていたのではないだろうか。

(2)と(3)は、貯蔵施設として貯蔵穴を伴うか否かの差である。集落の最盛期である後期後葉では、明確に貯蔵穴を伴う居住単位は松尾頭E群と妻木山A群のみであり、両群は斜面地に位置するという立地条件が共通する。それに対して丘陵頂部縁辺や平坦面においては高床倉庫が一般的であり、貯蔵穴は高床倉庫を補完するものとして利用された⁷⁾とも解釈できる。これが終末期になると、丘陵頂部縁辺である妻木山H、L群において貯蔵穴が造られ始め、高床倉庫と併存しつつ、古墳時代前期まで存続する。高床倉庫とは別に貯蔵穴を必要とする何らかの事情が生じたことが窺われ、先述した容積の大型化についても、不足した高床倉庫の貯蔵量を補おうとした結果とも考えられるが、その背景を明らかにすることは今後の課題である。

まとめ

以上、妻木晩田遺跡における居住単位と貯蔵施設との関係について整理した。その結果、共同管理された高床倉庫を伴う居住単位と伴わない居住単位との二者を想定し、前者が階層的に上位にあるものと考えた。貯蔵穴と高床倉庫の違いについては、古墳時代前期まで両者が併存することから時期差ではなく、斜面地では貯蔵穴が多く造られるという立地の違いも認められるものの、一般的には高床倉庫が利用され、貯蔵穴はそれを補完するという機能分担があったという見通しを得た。また、集落が大きく展開する後期以降、八峠が東伯耆の大規模集落について指摘した(八峠前掲)ような、貯蔵穴の集中的分布は認められない。妻木晩田遺跡における生産物の共同管理は特定の居住単位に伴う高床倉庫によって行われたものであり(パターン4)、限定的な存在であること

から、祭儀等と関わる特殊なあり方であったことが推測される。

結論として、妻木晩田遺跡における生産物の管理は原則として住居ごとに行われたものであり、自律性の強い集団が丘陵上に集住したとする妻木晩田遺跡の集落像(高田2003)を裏づける結果となった。ただし、高床倉庫の共同管理のあり方からは、各居住単位が決して等質的な存在ではなかったことが窺える。

次の課題は、周辺地域の他の集落遺跡との比較検討を行い、今回検討した妻木晩田遺跡でのモデルを相対化することであるが、本稿では果たせなかった。後考を期すこととしたい。

(君嶋 俊行)

註

- 1) 鳥取県下では、火災で放棄された猫山遺跡(倉吉市)の貯蔵穴から穂付きの炭化米や粟が出土した例がある(倉吉市教委1975)。
- 2) 鳥取県内の東伯耆を中心として弥生時代の貯蔵穴を検討した八峠興は、「貯蔵穴の平面は円形、楕円形、方形、断面は袋(フラスコ)状、垂直に近いもの、横穴状を呈するもの」があり、これらを貯蔵穴とみなす根拠として「①貯蔵穴から炭化米や粟が出土している例がある。②底面の周縁に溝をもち、防湿を意識したとみられるものがある。③底面や壁面に貼床(壁)を施したものがある。④廃棄用の土坑に転用され、土器の出土状況も廃棄あるいは流れ込みが多数で、放棄されるまでは空間を利用していたと考えられる。」と述べる(八峠2000、p88)。
- 3) 妻木晩田遺跡では、壁面に断面袋状の土坑を伴う妻木山地区SI176(後期後葉)や、壁際に3基の断面袋状の土坑が等間隔に並んで検出された妻木山地区の竪穴状遺構(SI173と重複)の例がある。
- 4) 丸山遺跡(鳥取県三朝町)では、貯蔵穴35基中底面にピットを有するもの12基、溝を有するもの6基であった。その機能については「雨水を集めるためであろう」と推測されている(伊達編1984)。
- 5) 中期後葉の貯蔵穴は妻木山地区でも確認されているが、その分布は2区西端の丘陵肩部に限られ、かつ周辺で住居が確認されていない点は、松尾頭地区と同様に特異な状況である。
- 6) SB211は時期不明であるが、SI148と近接することからこれとの同時並存は考えられず、従って3基の貯蔵穴とも時期を違えることになる。

7) 高床倉庫と貯蔵穴がどのように使い分けられたかについては明確にできないが、貯蔵穴は高湿度となる点で高床倉庫に劣るものの、火災や略奪に対して効果的との指摘がある(伊達編1984、木下1988)。また、高床倉庫に比べてその構築に多くの労力や木材を必要としない。貯蔵穴はこうした特長から、非常用の貯蔵施設としての性格、あるいは集団よりも各住居に伴う簡便な施設としての性格が強かったのではないだろうか。また、終末期以降貯蔵穴が増加する背景には、高床倉庫建築のための材の枯渇という要因も考えられる。

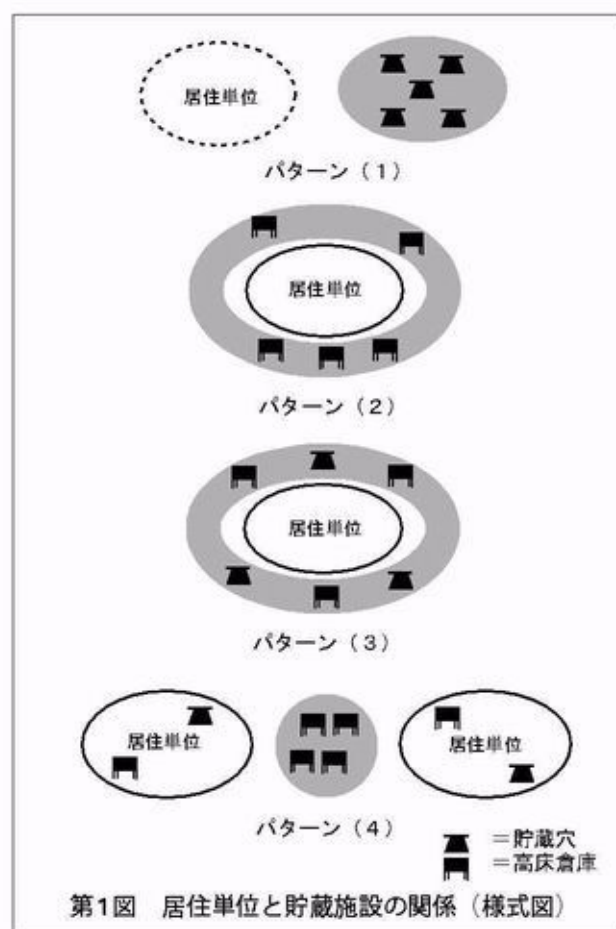
引用・参考文献

- 石野博信1967「弥生時代の貯蔵施設」『関西大学考古学研究年報』1、関西大学考古学研究室
- 乙益重隆1983「袋状竪穴考」『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集(上)』吉川弘文館
- 木下正史1988「初貯蔵と収穫」『弥生文化の研究2 生業』雄山閣
- 倉古市教育委員会1975『猫山遺跡—第3次発掘調査概報—』
- 佐原真1979「弥生時代の集落」『考古学研究』25-4、考古学研究会
- 高尾浩司2006「鉄器保有状況にみる最盛期の集落構造」『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書』馬路晃祥編、鳥取県教育委員会
- 高田健一2003「妻木晩田遺跡における弥生時代集落像の復元」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』馬路晃祥編、鳥取県教育委員会
- 伊達宗泰編1984『丸山遺跡発掘調査報告書』三朝町教育委員会
- 中原斉2002「妻木晩田遺跡における掘立柱建物跡(1)」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2001』濱田竜彦編、鳥取県教育委員会
- 丹羽野裕2002「山陰の高地性集落—塩津丘陵遺跡群を中心に—」

『月刊文化財』470、第一法規

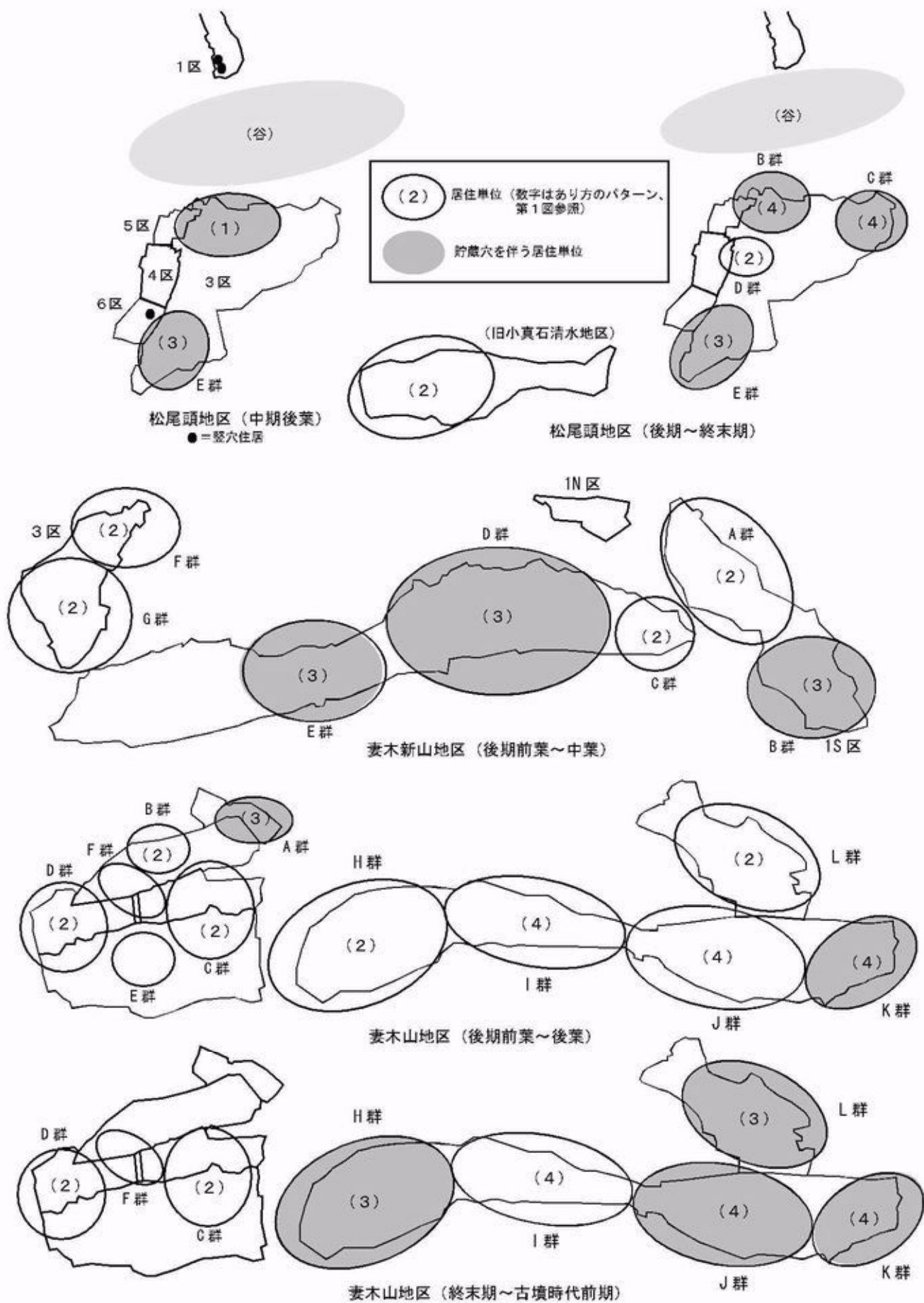
馬路晃祥2006「第X章 総括」『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書』馬路晃祥編、鳥取県教育委員会

八峠興2000「弥生時代の集落内における貯蔵穴の役割—東伯耆を中心として—」『島古墳群 米里三ノ寄遺跡 北尾釜谷遺跡(北尾古墳群)』八峠興他編、鳥取県教育文化財団



第1表 妻木晩田遺跡 時期別・地区別貯蔵穴検出数

時期	松尾頭	妻木山	妻木新山	松尾城	仙谷	洞ノ原	計
中期後葉	15	3	0	0	0	1	19
後期前葉	2	0	2	0	0	0	4
後期中葉	7	0	3	0	0	0	10
後期後葉	8	4	0	0	0	0	12
終末期前半	1	3	1	0	0	0	5
終末期後半	3	11	3	0	0	0	17
古墳時代前期	0	7	0	0	0	0	7
時期不明	7	13	5	2	1	4	32
計	43	41	14	2	1	5	106



第2図 麦木晩田遺跡 貯蔵形態パターン分布図 (S=1/4,000)